

但馬地方における酒造出稼の現況

大 西 正 曹

目 次

はしがき

一、最近の但馬酒造出稼の動向

(一) 出稼者の高年齢化

(二) 出稼期間の長期化

(三) その他

二、酒造出稼の要因

(一) 一般的要因

(二) 現時の出稼要因

は し が き

三、酒造出稼の變貌の影響

(一) 酒造業への影響

(二) 酒造出稼者への影響

(三) 杜氏制度への影響

(四) 農業への影響

(五) 農家への影響

む す び

國民經濟の高度成長長期過程における變化は、傳統産業で、とくに前近代的なものを多く残している、清酒製造業に對しても少なからざる影響を及ぼしている。すなわち、大部分が中小企業である清酒製造業は、從來からの前近

但馬地方における酒造出稼の現況

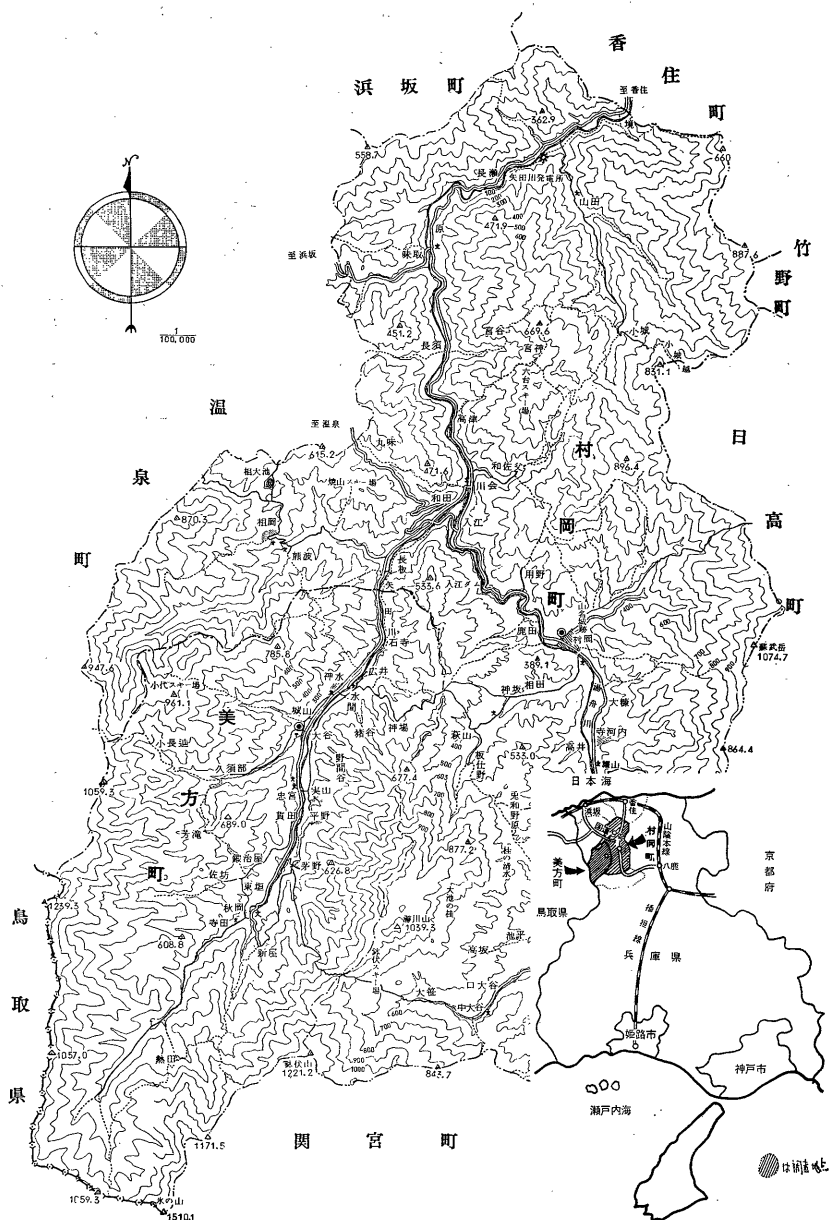
代的な生産設備による労働集約的な製造方法と、農村における豊富で安い季節出稼者を中心とする労働力とに依存した生産活動であつて、在地市場を對象とする比較的狭い市場圏に依存した販賣活動や、原料米の割當制度、および、免許制度などを基盤としての經營を續けてきた。⁽³⁾しかし、技術革新の伸展、また、昭和四十四年度の産米から實施されることになつた米穀の自主流通制度（五年後に完全自由化）や、酒類間、大・中・小企業間の市場競争などの環境條件が變つてきた。これに加えて、最近の雇用構造の變化に伴つて、若年労働力を中心とする労働力不足、農業人口の流出、農村に對する若年労働力の補充が減少してきた。このことにより酒造労働力の供給源である農村の労働事情が變化した。その結果、酒造季節労働者が不足するようになってきている。この様に、酒造業をとりまく諸條件が變化しつつある。

これに對處するため、生産工程の機械化、連續化、一部醸造工程の自動制御、さらに體系的新生産型式としての四季醸造等の技術革新が進み、これにともない、これまでの前近代的な經營組織、勞務管理において近代的な形態への變革が見られる狀況にある。

この様な變革が主として、酒造季節労働者（酒造出稼者）の側から昭和四十二年度に但馬（兵庫縣美方郡村岡町・美方町）で實施した酒造出稼者の實態調査、及び、既存の資料をもとにして分析考察しようと思う。

一 最近の但馬酒造出稼ぎの動向

(一) 出稼者の高年齢化



農業人口の減少と高齢化は、必然的に酒造出稼者を高年齢化にもたらした。すなわち、當地方における酒造出稼者の年齢構成をみると、一九歳以下、一・五％、二十歳臺八・八％、三十歳臺二四・三％、四十歳臺二七・九％、五十歳以上三七・五％であり中高年齢勞務者が多くなっている。特に、四十歳以上が七割近くを占めている。一方、酒造出稼者に關する全國的統計では、十九歳以下三・六％、二十歳臺一八・七％、三十歳臺三〇・五％、四十歳臺二六・五％、五十歳以上二〇・七％であり、當地方の酒造出稼者の高齢化がかなり進行していることがわかる。

(村岡町は昭和四十三年度出稼實態調査報告書・全國は國稅廳「清酒製造業實態調査報告書」昭和四十四年・二四五頁による)

(二) 出稼期間の長期化

出稼者の就業狀況は、刈入れの終る十一月に出かけ、農耕の初まる翌年四月に戻る場合が多く就業期間も六ヶ月にわたるものが最も多い。最近の傾向としてこの期間がますます長くなつてきている。すなわち限られた生産設備と勞働力によつて酒の需要増加に應ずるために操業日數の延長に對應して、出稼日數が長期化してきている。長期化の原因の今一つは、失業保險の制度であり、その受給條件が六ヶ月以上就業となつてゐるということである。このため六ヶ月以上出稼をおこなつてから歸るようになる。こうした出稼期間の長期化が可能になつたのは、最近の技術革新の進行により、一方では温度制御等により四、五月頃まで醸造を續け得るようになったと同時に、他方では農業技術の進歩や小型農業機械の普及による所要勞働力の大幅減少の結果、出稼者の歸郷がおくれてもそれほど營農に支障をきたさなくなつたためであると考えられる。

さらに、昭和四十一年八月、丹波・昭和四十二年八月、但馬で實施した酒造出稼者の實態調査結果より、この事柄をみると、第一表の如く、丹波では明治・大正・昭和一年々十年頃にかけて大半が八〇日〜一二九日であつた

第1表 酒造出稼日数の變遷

但馬地方における酒造出稼の現況

地域	出稼 日數 年次	80日 〃 99	100 〃 119	120 〃 129	130 〃 139	140 〃 149	150 〃 159	160 〃 169	170 〃 179	180 〃 189	190 〃 199	200 〃	計	
丹波	明治・大正	4	4	5		1	3	1	2				20	
	昭和1年 ～10年	2	3	3	2	1	3			1			15	
	11年～19年	3	5	2		1	2		1				14	
	20年～30年	1	7	8	2		4			1	1		24	
	小 計	10	19	18	4	3	12	1	3	2	1		73	
	31年～39年	2		2	2	1	2	1	1	1		1	13	
	40年		2 1.7	1 0.9	3 2.6	11 9.6	24 20.9	20 17.4	16 13.9	26 22.6	1 0.9	11 9.6	115 100.0	
但馬	出稼 日數 年次	79日	80 〃 99	100 〃 119	120 〃 129	130 〃 139	140 〃 149	150 〃 159	160 〃 169	170 〃 179	180 〃 189	190 〃 199	200 〃	計
	明治・大正	1	2	2	1	1	1	2				1		11
	昭和1年 ～10年			4	1	3	2	2	2		1			15
	11年～19年			7	3	3	4		1		1	1		20
	20年～30年	2	5	9	6	5	3	1						31
	31年～40年			3	2	2	2	1	2			1		13
	41年			2 1.4	6 4.1	19 13.1	39 26.9	41 28.3	21 14.5	7 4.8	7 4.8	1 0.7	2 1.4	145 100.0

下段の數字はパーセント

第2表 出 稼 者 数

	人 口 (43年A)	就業人口 (40年B)	世帯数 (43年C)	出稼者 (43年D)	人口對出 稼者比率 D/A(%)	就業人口對 出稼者比率 D/B(%)	1世帯當 りの出稼 者 D/C
村岡町	9,067	5,290	2,279	1,674	17.42	31.42	0.73
美方町	4,135	2,221	936	717	17.34	32.28	0.77
多紀町	5,830	3,323	1,387	463	2.94	13.93	0.33

兵庫縣企画部「兵庫縣における過疎の現状と課題」（實態編）昭和44年，
52頁。

美方町のみ 美方町役場「町勢要覽美方」1969年。

第3表 季節勞務者數（昭和43年）

	酒造工	早乙女	蚕 種	工場勞務	その他	計
村岡町	1,319	147	21	173	14	1,674
美方町	554	87	9	35	32	717

村岡町，美方町町各役場「村岡町，美方町町勢要覽」1969年。

のが、昭和四十年年度においては一五〇日未満がわづか
一四・八％にすぎず、その大半が一五〇日以上で一八
〇日以上が三二％にも達している。但馬においてもほ
ぼ同様である。すなわち昭和十九年までは一三九日ま
でが大部分であつたのが、昭和四十一年度では、一三
九日まではずか一八・六％にすぎず、一五〇日以上
が大半を占めるようになる。しかしながら、その出稼
先が地方の中小メーカーが中心であるため、丹波ほど
長期化はしていない。⁽⁴⁾

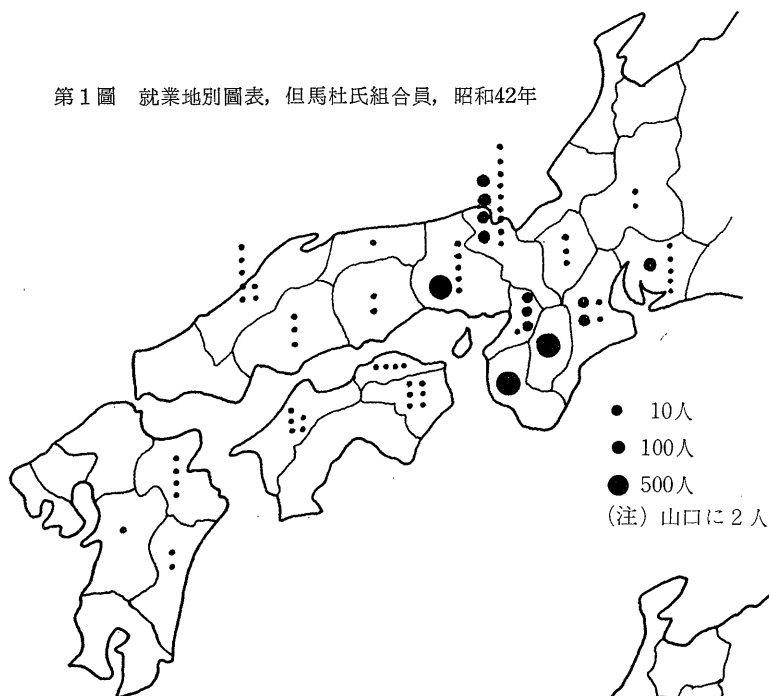
（三） その他

當地方の總就業人口に對する出稼者の比率は第二表
の如く、美方町・村岡町のいずれも三〇％を越してい
る。また一世帯當りの出稼者數は美方町〇・八人、村
岡町〇・七人と前年度の調査地の一つである、多紀郡
多紀町の〇・三人の倍以上の人が出稼に従事している。
これを農家一世帯當りの出稼者で見ると美方町・村岡
町とも一世帯一人以上の割で出稼にでている。

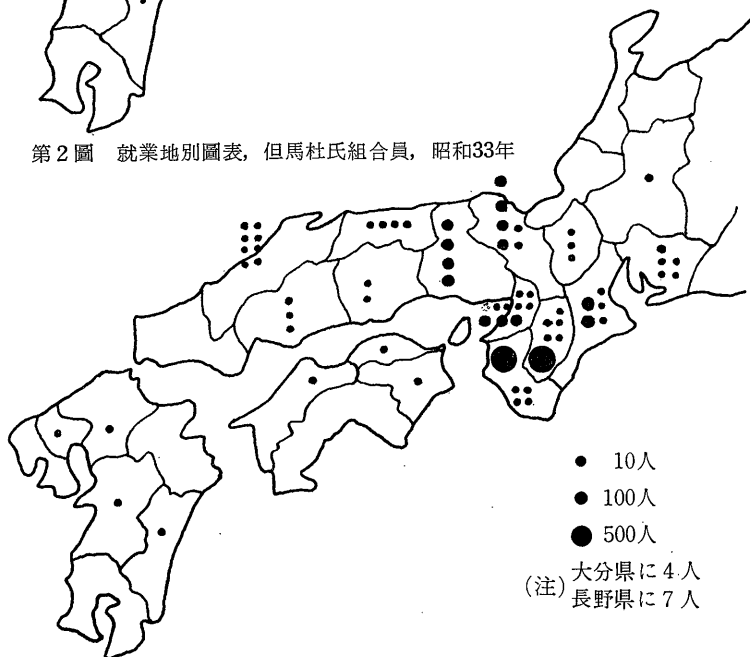
出稼者の就業形態は、第三表の如く村岡町、美方町ともに八割近くが酒造工としてである。これは現在でも、この地方においては杜氏出稼の傳統がなお生きていることを示すものである。次に酒造出稼者の就業地は第一圖の如く、廣く兵庫・奈良・和歌山・京都・大阪・三重の各府縣にわたっており、これらの地域で根強い杜氏の傳統的地盤をもっている。これと昭和三十三年度の酒造出稼者の出稼地を圖示した第二圖と比べると、過去十年間に、奈良・和歌山・大阪・鳥取の各府縣が減少したのに對して、灘・伏見のある兵庫・京都が増加している。これは、奈良・和歌山等で酒造關係の企業數が減少したのと、從來は丹波杜氏がほとんどであつた灘・伏見において丹波地方の都市化にともない出稼者が少なくなりこの不足を但馬杜氏が補つてゐるためであると考えられる。就業地の經營規模は、第四表の如くである。すなわち杜氏は一〇〇〇石未満四八・六%、一〇〇〇石〜三〇〇〇石が四五・九%であり、そのほとんどが三〇〇〇石未満である。一方平藏人もほぼ同じことがいえる。出稼先での賃金は、酒造勞務者が平均一日當り一八〇〇圓であり、工場勞務者の平均一六〇〇圓より高くなつてゐる。そして、出稼による所得は年三〇萬前後と見込まれる。⁽⁶⁾

從來、女子は酒藏がけがれるといつて酒造出稼にはいかなかつた。しかしながら、昨今の人手不足から、この杜氏集團にも女性の數が増えている。「……たとえば寶酒造（京都市）には、ことし百四人の出稼ぎがやつてくることになつてゐるが……數年前から『ままや』と呼ばれる炊事係は女性になつたが、ことしから酒をしぼつた後のカスを取り出す作業も女性にかわつた。今後は農家の事情も考へて夫婦づれで呼びたいとしてゐる。」（昭和四十三年十一月十二日付、日本經濟新聞朝刊より）昭和三十七年度の酒造出稼者のうち女子は村岡町二・七%、美方町五・一%であり、昭和四十三年度の酒造出稼者については、村岡町七・四%、美方町七・五%であり、とくに昭和四十年以後

第1圖 就業地別圖表，但馬杜氏組合員，昭和42年



第2圖 就業地別圖表，但馬杜氏組合員，昭和33年



第4表 酒造出稼者の出稼地と酒造家の経営規模

但馬地方における酒造出稼の現況	職役	経営 出稼地 規模	1000	1000	3000	5000	計
			石未	〃 3000	〃 5000	〃	
杜氏	平藏人	和歌山縣	4	11	1	0	16
		奈良縣	7	7	0	0	14
		三重縣	5	3	0	0	8
		大阪府	6	3	0	0	9
		京都府	4	2	0	0	6
		兵庫縣	4	0	0	0	4
		灘・伏見	0	2	1	2	5
		四國	1	4	0	0	5
		その他	5	2	0	0	7
		總數	36 48.6	34 45.9	2 2.7	2 2.7	74 100.0
平藏人	平藏人	和歌山縣	3	6	3	2	14
		奈良縣	3	6	1	0	10
		三重縣	4	6	1	1	12
		大阪府	4	7	0	0	11
		京都府	4	2	0	0	6
		兵庫縣	3	3	0	0	6
		灘・伏見	0	1	2	2	5
		四國	3	2	0	0	5
		その他	1	0	1	0	2
		總數	26 36.6	32 45.1	8 11.3	5 7.0	71 100.0

下段の數字はパーセント

第5表 経営耕地規模別戸數並びに酒造出稼者

	～3反	～5反	～7反	～10反	～15反	15反～	計
村岡町	383 (22.9)	419 (25.1)	432 (25.8)	332 (19.9)	93 (5.6)	13 (0.7)	1,672
美方町	121 (17.7)	215 (31.5)	199 (29.1)	121 (17.7)	26 (1町以上) (3.8)		682
杜氏	7	13	26	16	9	2	74人
平藏人	11	13	21	16	9	0	71人

1965年農業センサス。昭和42年度實態調査。

(註) ()内は%, 昭和42年度實態調査は, ～3反, ～5反, ～8反, ～10反, ～12反, ～15反, 15反～となっている。

この傾向が強まっている。⁽⁷⁾ 世帯の中での地位別に出稼者をみると、その殆どが世帯主と跡取りであり、これらで九八・五％にもなる。(昭和四十二年酒造出稼者實態調査) また經營耕地規模別では第五表の如く五反〜八反前後の所に出稼者が集中している。

二 酒造出稼の要因

酒造出稼は傳統的・慣習的に行なわれてきているため、出稼要因の中には當然歴史的なものも含まれる譯であるが、これについてこれまでかなり詳細に研究されてもいるので、この小論においてはふれず、現況での酒造出稼の要因について以下考察する。⁽⁸⁾

出稼は一定期間生活本據地から離れて、現在の生活水準を維持するのに足らない農業収入を補う意味で、賃労働者となることである。その期間は永久的でなく、かなり長期にわたる場合もあるが多くは季節的であり、必ずしも歸が行なわれる。⁽⁹⁾ 出稼の要點の一つは農業所得でもつてその生活を維持出来ないため、農業外所得でこれを補う點にある。それではなぜ當地方に於いて第六一・二表でみられるように、農業収入が少ないか、また兼業をする場合なぜ出稼をおこなうか以下みてみよう。

(一) 一般的要因

農業は最も自然的な要因により影響を受けやすいものの一つである。但馬地方は、兵庫のアルプスと云われる程の千メートル級の山岳に四方を圍まれているため耕地面積が少ない。すなわち、村岡町・美方町の昭和四十年度の土地利用別面積並びに經營耕地別戸數を示すと、第七表の如くその大半が林野であり、一戸當りの經營耕地面積は

第6-1表 農 家 所 得

	金 額	指 数
縣 平 均	795千圓	100
但 馬 平 均	540	68
美 方 町	432	54

兵庫縣社會福祉協議會「美方町のおかあさん」昭和43年，10頁
農林省農家經濟調査
美方町は同町農業診斷より

住民1人當り・市町内生産所得

縣	230千圓	100指數
美 方	144	63
神 戸	281	122
村 岡	184	80
香 住 町	196	85

兵庫縣統計課
「兵庫の統計」
昭和39年

第6-2表 農産物販賣規模別農家の構成

	～10萬	10～30萬	30～70萬	70～100萬	100萬～
村 岡	59.4(%)	34.4	6.0	0.2	0
美 方	63.3(%)	33.7	2.6	0.2	0.2

兵庫縣企畫部「兵庫縣における過疎の現状と課題」昭和44年28頁，昭和40年農業センサス

第7表 土地利用別動向と經營耕地別農家數

	總面積	農 地		林野率	總農家數	～3反	3反以上5反	5反以上7反	7反以上1町	1町以上1.5町	～
		總數	うち田								
村岡町	100(%)	9.0	(6.3)	85.3	100(%)	22.9	25.1	25.8	19.9	5.6	0.7
美方町	100(%)	8.3	(6.0)	89.3	100(%)	17.7	31.5	29.1	17.7	3.8(1町以上)	

美方町・村岡町，町勢要覽，1969年

五反以下が五割近くを占めきわめて零細であるだけでなく、山間柵田の水田單作農業であり區畫整理もなされていらない状態である。これらの土地の惡條件に加えて冬期間の天候は著しく惡く十二月月上旬から四月までの四ヶ月間はほとんど連日雪であり、最深積雪量は一

・二mにも達する、この悪天候により冬期間の屋外労働が困難になり裏作も不可能であるため農業所得は低い。この條件に合う但馬牛・養蠶・高冷地野菜（わさび・しいたけ等）・園藝・養鶏・養豚等をおこなっているが農家の家計を支えるだけの所得はえられない。農家の生活費は耐久消費財の普及、農業經營の機械化のための投資や食生活の向上、教育投資やレジャー消費の増加等により多くなる一方である。⁽¹¹⁾ 以上述べたような理由に基きこれを補充するために農業以外に兼業を求める。つぎに、この兼業が當地ではなぜ主に出稼という形態をとっているかの要因について考えてみようと思う。

(二) 現時の出稼要因

自然的條件・農業經營的條件が悪くても、奥丹後の大宮町・野日川町の如く、丹後ちりめんという有利な農村工業があつたならばその方面に餘剩勞働力を利用出来るのであるが、⁽¹²⁾ 當地方ではこれら特殊の農村工業が存在しない、またこれらの農村工業がなくても近くに勞働力を吸収しうるような中堅都市が存在して、⁽¹³⁾ そことの交通が便利であつたならば、通勤兼業が可能となり出稼が少なくなるものと考えられる。例えば前回の調査地である多紀郡篠山町の場合、福知山線のデーゼル化、道路整備により阪神間へは一時間以内での時間距離になり、その通勤圏に入るようになったので當地方では出稼から工場通勤、通年兼業への移行が最近顯著に進行している。⁽¹⁴⁾ このため、この地方では酒造出稼はもはや必須のものではなく、人々の選擇に任されるものになつてきている。

しかるに但馬では冬期國道九道線及び縣道は交通があるが、これら幹線道路より離れた各集落は交通が途絶える。また各集落から最寄の交通機關までの所要時間が一時間以上の戸數が二割近くもあり、⁽¹⁴⁾ 主たる交通機關であるバスの回数はきわめて少なく、各戸にとって自動車・單車はこれを補うものとして必要なものになつてゐる。またバス

を利用する場合でも、最寄の町までは一時間ないし二時間以上かかり、交通の便が悪い、そのうえこれらの町は當地方の餘剩勞働力を吸収しうるだけの勞働市場ではなく、豊岡・姫路までは遠すぎて通勤出来ない。これらの點に但馬地方に出稼が多いことの原因があるように思われる。

以上述べた要因以外にも二・三の要因があげられる。まずその一つは、但馬地方では傳統的に酒造出稼がおこなわれてきたことである。たとえば青年の精神修業として、農家の戸主は長男（跡取り）二、三男を出稼に出す習慣がある。青年はこの出稼を終えて始めてこの地方では一人前の男として取り扱われているといわれている。そのため、出稼をしない者は女子供か、腰抜けと云われた。やむをえざる理由のないかぎり出稼に出て行つた。⁽¹⁵⁾

その二は他の季節出稼者よりの轉化が考えられる。「村岡・兎塚・熊次の町村では、酒造も酒造ながら、より多くが凍豆腐職人に出かけていた。所が、冷凍工業の發達により、失業したこれらの多くの凍豆腐出稼者がドット酒藏稼ぎになだれこんだので、例えば昭和元年の調査で村岡地區から約一二〇〇名の稼人が出たのが、昨夏の講習會には出席者が二千名をこえていたし、一昨冬の調査で杜氏だけで二五八名あつた（藏人は杜氏の七十倍とみられる）。」
（篠田統「西日本の酒造杜氏集團」京都大學人文科學研究所一九五七年七頁）と記してあるが昭和四十三年に當地で調べた調査によると第八表でみられるとうり昭和九年（この頃から凍豆腐出稼者が冷凍工業の影響により順次減少しつつあつた）から昭和十八年に至るまでの凍豆腐出稼者の變動と昭和十年から昭和十七年に至る酒造出稼者の變動を比べて見ると、昭和九年當時村岡町で二九五名あつた凍豆腐出稼者が昭和十八年には七三名と減少している。しかしながら、昭和十年當時同じく村岡町で酒造出稼に従事した人は四五〇人であつたのが昭和十五年五二五名となり、七十名弱増えたが昭和十七年には三九三人と激減している。もし前記篠田氏の説が正當であるならば村岡町におけるこれらの數

第8表 年度別村岡町・美方町凍豆腐、酒造出稼者組合員數

	村岡町（凍豆腐）			美方町	村岡町（酒 造）			美方町
	村 岡	兎 塚	射 添	小 代	村 岡	兎 塚	射 添	小 代
昭和9年	295	505	400	508				
10年					450	109	671	588
11年	168	311	449	474	453	190	600	574
12年	194	239	127	289	485	219	667	636
13年	115	258	146	318	380	235	667	437
14年	79	218	150	97				
15年	118	215	150	87	525	235	685	414
16年	64	154	147	89				
17年	74	152	150	89	393	190	684	414
18年	73	142	150	89				

但馬凍豆腐製造従業者組合記録 下段は舊町名

但馬杜氏組合記録

字は何を意味するのであるうか、氏の説に従えば昭和九年から昭和十八年に至る凍豆腐出稼者の二二二名は當然酒造出稼者になるはずである。しかるに昭和十年から昭和十五年にかけてその數は七十名弱しか増えず、逆に昭和十七年に至つては昭和十年當時より五七名減少している。昭和十八年以後の資料不足の爲、明確な事は云えないが昭和九年から昭和十八年に關するかぎりこの季節勞務者からの轉化と云う要因はあまりなかつたものと考えられる。尚、つけ加えると昭和三十年頃から清酒の需要が増えて酒造産業の勞働吸收力が増しつゝあつたので酒造出稼者數も増加している。⁽¹⁰⁾

三 酒造出稼の変貌の影響

近年の酒造業の内外にわたる技術革新を根本原因として、酒造出稼の期間が長期化する一方、農村における若年の殘留者の減少のため、出稼勞働力が窮屈になり酒造出稼者の年齢が老齡化すると云う傾向のあることを指摘した。次にこれら諸傾向が酒造業を初めとして、酒造出稼者、杜氏制度や農業、

農家等に與える影響を以下村岡町、美方町を例にとり明らかにすると共に、これを繞る諸問題がどのように展開するか見ようと思う。

(一) 酒造業への影響

但馬地方では、毎年冬になると兵庫・京都・奈良・和歌山・大阪・三重に三千人弱の酒造出稼者が出る。この出稼者は杜氏がその地方の若い人を集めていたが、最近の農村における若年労働者の流出によりさつぱり集まらなくなつた。これら人手不足が中小メーカーのみならず大手メーカーにも深刻な問題となつてゐる。これに對處するため、酒造業に於ける企業合同や共同事業等が、試みられてゐる。例えば郡馬縣内のA酒造株式會社の場合昭和三十一年四つの中小メーカーが合併し、又兵庫縣下で瀧野酒造と銀鶴酒造が、三和酒造と六和酒造が合併し、それぞれ新會社瀧美人酒造と東播酒造を作つた。¹⁸⁾次に共同事業の例として群馬縣のB酒造株式會社の場合、縣内の四つの酒造メーカーの共同出資により設立された共同ビン詰工場があげられる。この工場の設立により生産者から原酒の全量移出と統一銘柄(聖徳)による清酒の共同販賣とが意圖され、將來はさらに共同精米、共同貯藏、共同製造が計畫されてゐる。これらは共同化により製品コストの引下げや合理化を目的としてゐる。¹⁹⁾そして大阪国税局の調べによると昭和四十六年度中に兵庫縣下で八社二十一グループが共同製造に踏み切る。共同事業として西宮市の甲陽醸造と新壽海が共同ビン詰めをおこなう、いつばう京都でも、今年中に七社十五グループの集約製造がおこなわれる豫定である。²⁰⁾

(二) 酒造出稼者への影響

農村に於ける若年労働力の流出が酒造出稼者の年齢を老齡化させてゐることを指摘したが、このことによつて第但馬地方における酒造出稼の現況

出稼者の酒造出稼に対する態度

楽 し く な い						何ともいえない	合 計
家離族との別	労働がきつ	休みがとれ	人に身かわれ	人との使うと	その他の	計	
1	0	1	1	1	10	0	15
4 5.6	3 4.2	5 6.9	5 6.9	7 9.7	31 43.1	0 0	72 100.0
2	0	1	0	3	8	0	19
7 6.6	3 2.8	7 6.6	6 5.7	11 10.4	49 46.2	0 0	106 100.0
1	0	0	0	3	4	0	8
6 12.8	5 10.6	4 8.5	0	16 34.0	36 76.6	2 4.3	47 100.0
2	4	1	0	3	14	0	23
9 11.5	9 11.5	5 6.4	0	22 28.2	54 69.2	2 2.6	78 100.0
16 8.7	12 6.5	12 6.5	6 3.3	33 17.9	103 56.0	2 1.1	184 100.0
2	1	3	1	5	12	1	14
9	2	4	6	10	41	5 8.6	58 100.0
0	1		2	1	5	0	9
11 13.6	4 4.9	7 8.6	9 11.1	16 19.8	58 71.6	6 7.4	81 100.0
2	3	1		2	9	1	10
12 30.8	4 10.3	2 5.1	1 2.6	11 28.2	34 87.2	2 5.1	39 100.0
2	5		1	5	16	2	23
16 22.2	12 16.7	3 4.2	2 2.8	18 25.0	59 81.9	5 6.9	72 100.0
27 17.6	16 10.5	10 6.5	11 7.2	34 22.2	117 76.5	11 7.2	153 100.0

りも多い。

第9表 年令別職役別地域別酒造

地域	職役	年令	酒造出稼に 對する態度					計	生仕 活方 のな たし めに
			酒自 造體 りが そ れし	金酒 かが 儲飲 める るへ	行暖 かか ける	藏が のよ い 雰 圍 氣	そ の 他		
丹 波	杜 氏	～39歳	4	0	1	0	5	6	
		40～59	30 41.7	5 6.9	1 1.4	5 6.9	41 56.9	7 9.7	
		60～	8	3	0	0	11	2	
		計	42 39.6	8 7.5	2 1.9	5 4.8	57 53.8	15 14.2	
	平 藏 人	～29歳	1	2	0	1	4	0	
		30～49	4 8.5	1 2.1	1 2.1	3 6.4	9 19.1	5 10.6	
		50～	5	0	1	3	9	4	
		計	10 12.8	3 3.8	2 2.6	7 9.0	22 28.2	9 11.5	
	合 計		52 28.3	11 6.0	4 2.2	12 6.5	79 42.9	24 13.0	
但 馬	杜 氏	～39歳	1	0	0	0	1	0	
		40～59	11 19.0	0	0	1 1.7	12 20.7	10	
		60～	4	0	0	0	4	1	
		計	16 19.8	0	0	1 1.2	17 21.0	11 13.6	
	平 藏 人	～29歳	0	0	0	0	0	1	
		30～49	2 5.1	0	1 2.6	0	3 7.7	4 10.3	
		50～	3	0	0	2	5	3	
		計	5 6.9	0 0	1 1.4	2 2.8	8 11.1	8 11.1	
	合 計		21 13.7	0	1 0.7	3 2.0	25 16.3	19 12.4	

備考：1人で2つ以上の理由をいう場合があるので、合計は有効サンプル数よ

一線を引退した老杜氏とか役員が再度酒造出稼の下働きとして出る傾向が見られる。例えば昭和四十二年度酒造出稼者求職申込書によると、村岡町丸味の杜氏A三十四歳が和歌山縣下のK酒造會社に連れて行つた出稼人は十八名である。そのうち上人Bは年齢六十歳でかつて杜氏として活躍した人であり、杜氏とは親戚に當る。また美方町新屋の杜氏Cが和歌山縣下のW酒造に連れて行つた出稼人は十一名であり、そのうち中人K・H・Fはそれぞれ年齢六十一歳・五十三歳・五十三歳で頭・杜氏・代司經歷者である。このように同じ藏に杜氏の経験者が二人おり、從來の如き杜氏の絶對的な權力の行使はしにくくなっている。この傾向はますます増加しつつある。

次に、この地方の酒造出稼者は出稼に對してどの様な態度をもっているかを實態調査結果よりみると第九表の通りである。すなわち杜氏で二割弱、平藏人で一割弱の者しか酒造出稼に對して楽しいと思つておらず、とくに酒造出稼の中堅である三十歳から四十九歳の年代に於いて（平藏人）この傾向が強い。楽しくないとする主たる理由は、家族との別離や生活の爲しかたなく行くことである。⁽²⁾同じ事柄を丹波についてみると杜氏で五割以上、平藏人で三割弱の者が酒造出稼に對して楽しいと思つており、とくに杜氏の四十歳から五十九歳では六割近くがそう思つている。この様な出稼に對する意識上の差異が生じたのは、但馬では生活のために仕方なしに行く（必須のものになつてゐる）ためであり、一方丹波は出稼先も灘・伏見の大メーカーが主たるものであり、近年通勤兼業が可能になつた爲、出稼が必須のものでなく選擇に任されるものになつてきているためである。

酒造業の技術革新は年間を通じて醸造可能な四季醸造と、洗米・蒸米・自動製麹機等を利用したオートメーション化により四十年から四十二年度にかけ、灘地方に於いて何らかのオートメ化をした企業が約半数にのぼりその間藏人の減少は三百人近くになる反面、生産量は二七・八%増加している。たとえば從來藏ごとに二十人・四十人

もの藏人が一齊に酒しぼりにかかったのが、今では人手なしに一日でしぼる。かような從來の様に酒造が人手を必要としなくなり、⁽²²⁾またこれらの一連のオートメーション化、四季醸造は季節的な勞務者でなくて通年勤務の勞働者を必要としており、またこのような四季醸造にはかなりの資金がいるため、大メーカーしか採用されていないがこれに類似する設備は近年各藏に於いて採用してきているため、酒造出稼者はこれらの機械を使いこなす能力を要求され、又、計數化が必要なものになってきている。よつてこの能力を持たない人は酒造出稼者として不適格になり三役並びに杜氏にはなれず下働人に止まる。そのため、經驗年數、技術は杜氏になるものを持つていながらこの様な能力がないため杜氏にならない人もある。又ある藏に於いては從來の杜氏（老令者）を替え若いこれらの技術をもつてゐる杜氏にしているかあるいは技術をもつた者を杜氏の助手としてつける藏もある。⁽²³⁾

(三) 杜氏制度に對する影響

「人手不足に對處して企業が近代化した爲、技術體系の推移が勞務關係に大きな影響を及ぼしている、すなわち、酒造勞務者は杜氏を通じて確保されているのであるがこの關係が次第にくづれつつある。從來麴・精白度等、原酒製造の基本的要素は杜氏らがおこなつてきたが近年技師により科學的に決定され、一定の溫度の保持と一貫した連續的製造工程は人手を用いず（人手を最少限にすることが雑菌の混入を防ぎ品質を一定にする要件でもある——O社某氏發言）したがつて杜氏の熟練と勘は不必要となり、杜氏はたんなる勞務管理上のフォア・マンとして機能し、技師の指揮命令系統に入る傾向がみられる（O社）。このような杜氏を頂點としていた勞働組織の變化は、このような典型的な轉化を遂げぬ場合においてもみられ、杜氏以下の職名變更に反映しており（I社）、また他方季節勞務者の年間雇傭者への轉化希望が強く出はじめてゐる（O社）。そして、この様な大メーカーでは勞務者の採用（季節勞務者でなく年

間雇用勞務者について）は學校、職安を通じて求人をおこなっている、また、季節勞務者も同一村落から構成されて「いない」（日本産業構造研究所「酒造業の構造實態調査」昭和四十二年三九〇頁）。この杜氏制度を支えてきた藏人の血縁的・地縁的關係は除々にではあるが解體しつつある。すなわち昭和四十二年度實態調査と同年の季節勞務者求職申込書により、この關係を見ると、杜氏と地縁的關係があるものはわずかに三四・一％に過ぎずとくに三役は地縁的關係をもつが、それ以外の藏人については廣範圍な地域から連れて行く傾向がある。これは杜氏出身村落における若年勞働者の確保が困難になつてきていることもその要因の一つである。また血縁的關係もほぼ同じことが云える。とくに、この關係が薄いのは藏人が多い酒造家に行つてゐる杜氏の場合顯著にみられる、例えば京都伏見〇酒造株式會社の季節勞務者求職申込書によると、杜氏K・五十八歲村岡町熊波が連れて行つた藏人は二十九人であり、そのうち、同じ部落から連れて行つたのは頭（三十八歲）上人二人（三十四歲・五十九歲）のみであり、美方町・香住町・溫泉町から、それぞれ美方町一人・香住町一人・溫泉町五人でそれ以外は村岡町の各部落から募集している。この中で血縁關係があるのは三名に過ぎない。

(四) 農業への影響

酒造出稼の長期化・基幹勞働力の出稼は農作業に影響を及ぼす、すなわち、苗代準備に支障をきたすと共に出稼中の過勞がもとで夏の作業が思うようにいかない爲、どうしても農業が粗放化し農業収入が減少する、よつて農業に對する關心や意欲が低くなる。このように長期出稼→農業粗放化→農業所得減少→長期出稼という惡循環をくりかえすことになる。また失業保險を受給している爲、夏期に短期間の土方やその他の勞働をしいられる。このことも農業の粗放化にいつそう拍車をかけており、これに對處するために農業を機械化しようとする。この購入

第10表 職役別耕作面積別酒造出稼者の酒造出稼収入以外の収入

但馬地方における酒造出稼の現況

職役	耕作面積	酒造出稼以外の収入											不詳	計
		0 ～ 9 万円	10 ～ 19	20 ～ 29	30 ～ 39	40 ～ 49	50 ～ 59	60 ～ 69	70 ～ 79	80 ～ 89	90 ～ 99	100 ～		
杜氏	～3反未満	1	2		1	3								
	3～5未満	2	2	4	3				1			1		
	5～8未満	1	1	8	6	6	3			1				
	8～10未満		1	1	4	6	1	2		1				
	10～12未満			1	1		3	2	1			1		
	12～15未満							1				1		
	15 ～					1								
	計	4 5.4	6 8.1	14 18.9	15 20.3	16 21.6	7 9.5	5 6.8	2 2.7	2 2.7	0 0	3 4.1	0 0	74 100.0
平蔵人	～3反未満	1	2	3	3	2								
	3～5未満	3	4	3	1			2						
	5～8未満	1	3	9	5		3							
	8～10未満	1	2	2	4	3	1	3						
	10～12未満			1		2	2	3	1					
	12～15未満													
	15 ～								1					
	計	6 8.5	11 15.5	18 25.3	13 18.3	7 9.9	6 8.5	8 11.3	2 2.8	0 0	0 0	0 0	0 0	71 100.0

資金を得る爲にも出稼は必要なものになつてきている。

(五) 農家への影響

世帯主の長期出稼のため主婦に對して心身の負擔が過重となることが云われてゐる。すなわち、冬期にする作業、作溝・剪定、そして除雪・雪折防止・畜産・消防活動と社會生活が主婦に要求される。こうした主婦の負擔は心身の衰弱を招き、精神的な衰弱さらには疾病の原因にもなり易く、また子供の教育面にも影

第11表 年令別職役別酒造出稼収入（昭和41年度）

職役	年令	酒造出稼収入	20萬円未満	20 ～ 30未	30 ～ 40未	40 ～ 50未	50 ～ 60未	60 ～ 70未	70 ～	不詳	計
杜氏	～39歳		0	6	4	1	0	0	0	0	11
	40～49		0	13	18	2	0	0	1	0	34
	50～59		1	8	6	5	0	0	0	0	20
	60～		0	5	1	2	1	0	0	0	9
	計		1	32	29	10	1	0	1	0	74
			1.4	43.2	39.2	13.5	1.4	0	1.4	0	100.0
職役	年令	酒造出稼収入	15萬円未満	15 ～ 20未	20 ～ 25未	25 ～ 30未	30 ～ 35未	35 ～ 40未	40 ～	不詳	計
平蔵人	～29歳		2	3	2						7
	30～39			6	10	3	1				20
	40～49		5	8	5	2	1				21
	50～59		3	6	3						12
	60～		2	4	3				1	1	11
	計		12	27	23	5	2	0	1	1	71
			16.9	38.0	32.4	7.0	2.8	0	1.4	1.4	100.0

響を及ぼし、父親不在による子供の
 我がまま・情（なま）ちよ不安となる。また農
 家の経済にはどの様に影響している
 かを昭和四十二年度の實態調査結果
 よりみると第一〇表の如く、酒造出
 稼収入以外の収入は杜氏が四〇萬圓
 前後、平蔵人三〇萬圓前後である。
 しかるに酒造出稼収入をみると、第
 十一表の如く、ほぼ農業所得に匹敵
 している。これ以外にも第十二表の
 通り、失業保険を一〇萬圓前後受給
 しておりこの二つの所得が家計を支
 えている。このため、當地方に於い
 ては單身離村こそ第十三表の如く村
 岡町一一・一％、美方町一〇・六％
 とかなり高いとしても、世帯の減少
 率は兩町ともに三％前後の減少（昭

第12表 季節勞務者の失業保険金支拂狀況

		支給人員	支 拂 金 額
村岡町	酒 造	1,344	127,160,540
	水産加工	8	156,020
	工 場	111	9,079,096
	計	1,463	136,395,656
美方町	酒 造	573	52,301,710
	工 場	96	7,564,350
	計	669	59,866,060

豊岡公共職業安定所作成資料，昭和44年4月16日。

第13表 過疎過密基本調査（昭和35年～40年）

人 口 減 (%)		人 口 増 (%)	
大屋町	15.2	川西市	46.2
上月町	13.7	伊丹市	40.4
多紀町	12.2	寶塚市	37.6
但東町	11.2	西宮市	28.3
村岡町	11.1	尼崎市	23.4
南光町	11.0	明石市	22.7
美方町	10.6	播磨町	20.4
西紀町	10.5	太子町	15.7
五色町	10.4	高砂市	13.9
關宮町	10.3	加古川市	13.7

兵庫縣企畫部「兵庫縣における過疎の現状と課題」（實態編）昭和44年，2頁。

和三五〇年（昭和四〇年）に過ぎない。これは過疎地として有名な島根縣匹見町等とは異り出稼という有利な現金収入の道があるため、過疎化にブレーキがかかっているのである。次に杜氏と藏人との酒造出稼による所得格差は

農家にどのような影響を與えているかをみるため、最初の出稼が昭和十五年以前のもの所有地面積の變動を昭和四十二年度實態調査報告書より作成した第十四表によつてみると、田畑面積では杜氏が三反未満層において減少し、八反～一町層が増加している。平藏人は三反～五反層に於いて増加している。いつぼう、山林面積は杜氏・平藏人とも一町未満層に於いて増加が見られ、無しが減少している。このように杜氏と平藏人の所得格差の影響があまりみられないのは、山村のため元來經營耕地が少ないうえ山林は大部分が一部の所有者のものであつたため、所有地を擴大する餘地がなかつたので、餘剰収入が所有地の擴大よりも、むしろ家の改築や營農資金・教育投資にむけら

れたためであると考えられる。

これらの外、酒造出稼者の職場移動にも影響が認められる。最近の酒造業の變革は出稼者の職場移動を激化させている。すなわち酒造業の技術革新は酒藏を減少させ（從來より機械化、大型ホーロタンク等により一藏當りの生産石數が増し、能率の悪い中小の藏を閉鎖し集中して生産をおこない合理化している。）たので杜氏の絶対數が減少しつつある。このことは大・中メーカーに於いて顯著にみられる。そのためこれら大・中メーカーから締め出された杜氏は、地方

の小メーカーに流れ、それに伴ない藏人も一緒に移動したのと、酒造業の技術革新について行けない老杜氏も同じ運命に立たされた。かように藏そのものが減少したため、平藏人から杜氏になるにはますます難しくなつてきており、かつ杜氏制度に變る技師を中心とする職場組織が増えている。このことも杜氏の減少化、移動の激化に拍車をかけている。

酒造出稼者の不足と老齡化は必然的に出稼賃金をあげてきている。賃金は各地區の杜氏集團で一律に決められており企業間の

のもの)の所有地面積の變動

計	山 林						計
	1町 未滿	1 〜 3未	3 〜 5未	5 〜	なし	不詳	
47	8	18	5	5	6	5	47
100.0	17.0	38.4	10.6	10.6	12.8	10.6	100.0
47	13	15	7	5	5	2	47
100.0	27.7	31.9	17.0	10.6	10.6	6.4	100.0
47	15	15	7	6	3	1	47
100.0	31.9	31.9	14.9	12.8	6.4	2.1	100.0
25	7	5	1	1	4	7	25
100.0	28.0	20.0	4.0	4.0	16.0	28.0	100.0
25	8	7	3	1	4	2	25
100.0	32.0	28.0	12.0	4.0	16.0	8.0	100.0
25	10	8	3	1	2	1	25
100.0	40.0	32.0	12.0	4.0	8.0	4.0	100.0

第14表 職役別酒造出稼者（最初の出稼が昭和15年以前

職役	所有地面積 年次	田 畑							
		3反未満	3 〳 5未	5 〳 8未	8 〳 10未	10 〳 12未	12 〳	なし	不詳
杜氏	最初の出稼時	9	5	13	4	4	5	2	5
		19.1	10.6	27.7	8.5	8.5	10.6	4.2	10.6
	農地改革時	6	11	13	8	3	4	1	1
		12.8	23.4	27.7	17.0	6.4	8.5	2.1	2.1
	現在(昭和42年)	3	12	16	9	3	3	0	1
		6.4	25.5	34.0	19.1	6.4	6.4	0	2.1
平蔵人	最初の出稼時	4	4	6	3	1	0	1	6
		16.0	16.0	24.0	12.0	4.0	0	4.0	24.0
	農地改革時	6	7	7	2	1	0	1	1
		24.0	28.0	28.0	8.0	4.0	0	4.0	4.0
	現在	3	10	6	4	1	0	1	0
		12.0	40.0	24.0	16.0	4.0	0	4.0	0

格差より役職間の格差の方が大きい、そのためこの賃金コストの上昇は、大メーカーではある程度カバーできるが中小メーカーでは苦境に立たされている⁸⁷⁾。また、高齢者が多い爲に従来程の役職間の賃金格差はなくなりつつある。よつて最近女性労働者が増えてきており、この賃金コストのカバーをするため機械化、合理化は必須の状態になつてきている。そして労働対策上も従来の生産システムから近代的な生産システムへ轉換しつつある。

むすび

但馬地方では耕地が少なく、他にこれという産業もなく、都市への通勤もまだ困難であるため、現在なお農閑期の酒造出稼は農家の生活維持のため必要なことになつて

いる。但馬杜氏は和歌山、奈良、三重縣等地方の小酒造家で働く者が多く、おおむね勞働條件も悪く生活のため仕方なしに出稼に行くので酒造出稼に對する態度も良好とはいえない。近年出稼期間の長くなつたことが指摘されるがこれは近年の酒造出稼者不足と一應かざられた現存の生産設備によつて酒の需要増加に對應しなければならぬという事情によるが、これを可能にしたのは、最近の技術革新の進行により、一方では冷房裝置などにより四、五月頃まで醸造が可能となつた。と共に、他方農業機械の導入によつて田植作業や準備作業（春の苗代）に費やす日數が短縮された爲であると考えられる。

本小論を草するに當り、數々の懇切なる御指導を戴いた甲南大學教授井森陸平先生、貴重な資料を借用させて戴いた關西大學教授西山美瑛子先生、佛教大學助教授老川寛先生並びに但馬杜氏組合事務長岸本敏氏、數々の助言をいただいた村岡町教育長福井一雄氏、村岡町總務課主事岩槻健氏に心から感謝致します。尚、本論は文部省試験研究費交付による「傳統産業における技術改良普及の過程・要因、その經營組織に及ぼす影響に關する調査研究」（研究代表者、甲南大學教授井森陸平）の調査研究資料の一部を使用したものである。また、本調査に當り種々の御力添えいただいた但馬杜氏組合員の皆様にも深甚の感謝の意を表します。

〔註〕

- (1) 「傳統産業はまず何よりも手工業的技術を基礎とし、特に長年月にわたつて、比較的に高度の技法を築きあげてゆき、容易に他の追隨を許さないまでになつたものである。」黒松巖「傳統産業の構造」同志社大學經濟學會「經濟學論叢」第十一卷、第四號、昭和三十六年九月、四頁。
- (2) 國稅庁編「清酒製造業實態調査報告書」昭和四四年・一頁に、中小企業者數の割合は九九・五%であると指摘している。
- (3) 國稅庁編「清酒製造業實態調査報告書」昭和三九年。一〇五頁。
- (4) 昭和四二年に實施した酒造出稼者實態調査によると、そのほとんどが地方の中小メーカーである。
- (5) 國稅庁、前掲書四四年・一四頁。

- (6) 兵庫縣企画部「兵庫縣における過疎の現状と課題」(實態編) 昭和四四年、五三〇五頁。
- (7) 昭和三十七年度は但馬杜氏組合資料、昭和四十三年度については、村岡町役場・豊岡公共職業安定所作成資料による。
- (8) 岡光夫「封建村落の研究」昭和三九年。篠田統「西日本の杜氏集團」一九五七年、京都大學人文科學研究所。神戸稅務監督局編「灘酒沿革誌」明治四〇年。西宮市「西宮市史」第二卷、昭和四〇年。丹波杜氏組合「丹波杜氏」昭和三二年。會津喜多方酒造組合出版委員會(伊藤豊松)「會津酒造の歴史」昭和四三年。
- (9) 四宮恭二「日本農業の社會學」昭和三〇年、一七一〜一八〇頁。
- (10) 「五・〇五人の家族の家計費を賄うるぎりぎりの經營耕地面積は三四年度に一・三六ha、三五年、一・三三haであつたものが四〇年には一・六四ha、四三年度には一・七九haとなつた。」(農林統計協會「中高年令農業就業者の就業移動要因に關する調査報告書」昭和四五年三月、四〇頁。)と記してある如く、當地の一戸當りの經營耕地面積ではとうてい家計費を賄いきれない。
- (11) 「さらに農家の家計にとつての重要な變化は、家計費中に占める現金支出の割合が高まつたことである。昭和三二年度の六五・四%から四一年度には七九・四%、昭和四三年度は七八・三%と、その八割近くを現金で支出しなければならず、三〇年代から四〇年代にかけて農家の自給經濟が激しく崩れ去つた。このことは、それだけ現金所得をはからなければ、農家の家計は維持できなくなつてきたことを示している。」前掲書、四二頁。このために當地では第15表の如く昭和三五〜四〇年にかけて、專業が減少し、第二種兼業が増加する傾向がみられる、この傾向はますます強くなるものと考えられる。
- (12) 京都府農業會議「奥丹後における兼業(半農半勞)農家の實態と動向」昭和三九年一一〜一四頁。
- (13) 篠山町役場調べ。
- (14) 兵庫縣「山村振興都道府縣調査報告書―村岡町」昭和四四年。
- (15) 美方町貫田の杜氏M46歳ならびに村岡町教育長福井氏も同じことを指摘された。又久保佐土美「但馬農民出稼の研究」(社會政策時報・第一七七號、昭和一〇年)一一頁においてもこの事が指摘されている。
- (16) 緑川敬・櫻井宏年「清酒業の經營と經濟」昭和四〇年、八一〜八二頁、二八六〜二八八頁。「村岡町の釜元K氏は死ぬまで一回も酒造出稼に従事しなかつた。凍豆腐をやめてから家で働いていた。凍豆腐出稼人はプライドを持つていたので酒造に行かず、他の工場労働に行つた。」(教育長福井氏談)。

但馬地方における酒造出稼の現況

- (17) 日本産業構造研究所「酒造業に於ける近代化事例の調査研究」昭和四〇年、三頁。
 (18) 日本經濟新聞、昭和四六年一月七日付。
 (19) 日本産業構造研究所、前掲書八〇九頁。
 (20) 前掲、日本經濟新聞。
 (21) このため、最近では出稼期間中に何回か歸省さす企業が多くなっている。
 (22) 日本經濟新聞、昭和四三年十一月十三日付。
 (23) 昭和四二年度酒造出稼者求職申込書によると、村岡町長板の杜F下（五二歳）は計算をする係の検査（清酒係）として温泉町春來のF（二八歳）を連れて行つてゐる。
 (24) タバコの苗の手入れ期間だけ歸省さす企業もある。
 (25) 總理府青少年局「出稼きの實態と子どもへの影響に關する研究」昭和四二年、三〇四頁。
 (26) 渡邊兵力編著「山村人口流動の本質と分析」昭和四二年、一〇七〜一一六頁、山村振興調査會。
 (27) 國稅庁編、前掲書、昭和三九年、六一頁。

第15表 専 兼 別 農 家 率

	農 家 數 40年	農 家 率 40年	40年の 對35年 農家率	専 業 率		第1種兼業率		第2種兼業率	
				35年	40年	35年	40年	35年	40年
村岡町	1,672	71.8	88.8	11.2	5.0	64.0	63.8	24.9	31.2
美方町	682	71.9	92.7	10.2	4.7	73.6	72.9	16.2	22.4

兵庫縣企畫部「兵庫縣における過疎の現状と課題」（資料編）昭和44年、11頁。